



## コメント関連資料(第2部コメント)

石川, 道子

---

**(Citation)**

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 9:23-25

**(Issue Date)**

2011-01-30

**(Resource Type)**

conference object

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002698>



## 第9回 歴史文化をめぐる歴史連携協議会

「地域歴史文化を担う人材像を考える」 コメント 地域連携センター 石川道子

○創業記念事業（小西酒造株式会社＝伊丹酒造組合）の史料展から

平成22年11月上旬、伊丹酒造組合の中核である小西酒造株式会社の創業460年記念事業として、同社長寿蔵2階ミュージアムにおいて「創業460年 小西新右衛門文書の世界」展を開催した。

この開催には10年前からの下地があった。10年前の平成12年、創業450年記念事業において、これより10年近く前より預り調査していた「小西新右衛門氏文書」のなかの「永代覚帳」「酒造秘伝書」などから、元禄15年冬仕込みの「白雪」（現在も同社の銘柄）の復刻をしたことから社員（主に技術部）の一部で小西家の古文書に対する関心が生まれ、これが今回の企画展につながった。

平成12年に復刻したときは、社員（酒造技術者）数名と当方が1年余をかけて小西家の古文書類のなかから酒の仕込みについて書かれた史料の勉強会を持った。社員の一部の方たちはこれによってはじめて自社の膨大な古文書の存在を知った。

自社史料による当時江戸積みした清酒「白雪」の復刻には、赤穂事件の吉良邸討ち入りというインパクトの強い時代を選んだ。会社の意向もあり、仕込み用の木桶などの新調はしながら、なお半信半疑での手探りの作業だったが、1年ほどをかけて復刻酒が完成し、東京・名古屋・伊丹での内見会から、販売に至り、大きな達成感があった。

この作業で強調したかったのは、単に「元禄の酒」ではなく「元禄15年当時の冬造りの江戸積み酒『白雪』」であり、これが自社の史料によって完成したことだったが、このときはどうも「忠臣蔵の時代の酒」の感覚だったようで、「自社に保有する史料」の意味がもう一つ希薄だったようである。

しかし、技術的な関心から、その後の清酒は？ということになり、そのため古文書の勉強会（月1回）が発足。小西酒造・伊丹酒造組合を中心とした有志が参加して、酒の仕込みだけでなく、江戸積み酒造業の経営形態、またその背景にあった町伊郷について小西新右衛門氏文書・伊丹酒造組合文書をテキストにした勉強会によって「小西家の古文書」が強く意識され、内容が広がっていった。

勉強会のなかで、清酒の味についてのニーズの変化を当時の江戸からの書状で読み、また「永代覚帳」に記された仕込みの変化を分析し、文化・文政（文政8年冬造り）仕込みの「白雪」を再現したところ、風味・色の変化が如実に現れ、「史料ってすごい」という実感を持ったことがこちらにも伝わってきた。

この流れから、平成22年、創業460年記念事業にむけて幕末（慶応3年）の仕込みが始まり、完成。もちろん企業であるから販売まで結びつけなければならない。

同年10月・11月 勉強会のメンバーを中心に、東京支店（中央区茅場町）の近くのホテルで小規模の内見会（1日、来場者80余人）を行い、続いて伊丹では小西酒造長寿蔵ミュ

ウジヤム（伊丹市中央）においてはじめての「小西新右衛門文書の世界」展（小西酒造主催、伊丹酒造組合・酒造家史料研究会協賛）を開催した。（3日間、来場者数400人前後）。広い会場の設営等は、古文書研究会員以外の方たちにも協力を仰ぎ、すべて手作りである。広い会場で古文書を中心とした史料の展示、復刻した元禄・文化文政・幕末と三時代の「白雪」の試飲、隣接した直販店で販売もあり、無事に終えることができた。

今回の展示会開催では、当会社が近世初頭から現在地にあり、江戸積み酒造を行っており、現在も同所で酒造会社として操業していること、また、江戸に設けられた酒問屋の沽券状などによって、当時の小西の江戸問屋が置かれていた場所が、現在の東京支店であることなどを社員が知り、地域と密着して歩んできたこれまでの当社のあり方を認識したことなどの意義は大きかった。

来場者の評価はおおむね好意的で、アンケートをみると、小西家の膨大な史料の存在は関係者にはよく知られているが、多くの市民には知られてなく、伊丹にこのような史料があることをはじめて知った。定期的にできないのか、などの意見を多数いただいた。

これまで「歴史文化の担い手」などと意識しなかった人たちが史料による「酒造り」という具体的な体験、達成感をもったことで、自社の酒造りの技術史から、その背景となった町のあり方に興味を抱き、周辺を歩き、古い写真を集め、展示会を開催する運びとなった（古文書の勉強会発足から5年）。まずは社員が、小西家文書の存在を知り、長い歴史を持った会社であることを古文書を通して確認したこと。また近隣地域の多くの人々に近世の酒造経営の一端を公開できたことなど、当事者が意識しないまま歴史文化の担い手になっていた。現在は酒造メーカーでも酒母は市販のものをを用いるため、自家では造れなくなっているところも多いと聞くが、技術の粋を集めた「酛造り」は継承されなければならない、と強く再認識された意義は大きい。

#### ○地域のイラストマップづくりを通して（御願塚史跡保存会）

伊丹市の南端の御願塚地区には地域の史跡「御願塚古墳」の保存会があり、清掃や周濠の水質の浄化や年1度の他地域の古墳の見学会などが持たれていたが、御願塚の歴史とは古墳であり、それ以外には何もない、と言い切っていた地域ではあるが、他所から引っ越してきた者の目にはあれこれいっぱいあった。そこで、マップづくりを提案。保存会の6人のチームによって、どういう作業を進めて行くのか何も分からないという状態ではじまったが、もともと、何かやりたいという人たちの集まりである。はじまると作業は順調に進んだ。メンバーが元からの古い御願塚の住人で、地域のいろいろな役を引き受けている方たちだったため、博物館や大学では手間のかかる、写真その他の使用許可などが、チーム内で即OKとなったのは、地域ならではであろう。

平成22年7月、「御願塚ふるさとマップ」が完成した（完成まで4年）。11月、地域の自治会館において御願塚ふるさとマップの披露と、来場者の全員がはじめて目にした地域史料＝明治5年の御願塚村古絵図（2メートル×3メートル）の展示会（1日）とシンポジ

ウムを開催した。

このことによって御願塚古墳のみに集中していた史跡保存会の意識・活動が、地域全体に広がり、御願塚地域のガイドができるよう既成の「御願塚文化財愛護少年団」（小学3年～6年）時代から勉強しては、という気運が生まれたことなど、活動の幅が広がりそうである。

史料による復刻酒造り、また地域のマップ造りによって、一つの達成感を体験したことが次につながるのではないかと思う。

「地域の歴史文化」に関心を持ち、それらに注目する人たちは多いが、花や樹木の世話、清掃、小学生の送迎など、自分ができることで地域に何かしたいという人も多く、それぞれ活動している。

最近、自治体などで歴史文化のボランティアガイドの育成講座がよく持たれている。これも一つの方法であろう。

また、このようなこととは無関係に、置場があるからと行き場のなくなった龍吐水を引き受けて、雨にあたらないうで通行人から見えるようにと設置方法を考えている人がいる。あるいは、じいさん（父親）が集め収納していた、古い生活道具を村の博物館として、鍵は興味のある人に預け、見たいと訪ねて来る人たちに開放している人がいる。そして彼らは自分が地域の歴史文化の担い手だなどとは夢にも思わず、置き場所があるから引き受けなければ、という地域における責任感がそうさせているようで、どこにも構えたところがなく至極自然体である。保存方法等については別の問題として、まずこのような気持ちの余裕が地域の歴史文化を守り、伝えてゆくのだと思う。どなたが作るのか、古墳の濠に1軒浮かんでいたカルガモハウスが最近3軒になっている。